わたしの「現代国語」教室（六）

――書き出す力 その一――

加藤宏文

はじめに

「自立と試行」(注1)は、羽仁進氏の随想である。ポーランド映画の紹介を、巧みに骨子とする。そのねらいは、青春を、一見奇抜な「タンス」に形象化し、深く考えさせるところにある。

一九八〇年四月、入学当初の四つのクラス一八二名は、これを独力で理解した上で、「わたしにとっての『タンス』」という題で、四〇〇字の文章を綴った。年間自習課題一九編中の第一、中学校でつけえた表現の力である。

この四〇〇字は、どのように書き出されているか。全体の文章論理・構造のありようとこの「書き出し」とは、どのようにかかわっているのか。みすえて、「表現」学習における「書き出し」指導をどうするか。究めたい。

なお、「書き出し」の指導や研究については、大村はま氏の、実にゆきとどいた実践(注2)や、野地潤家先生の、感動的なご授業の記録・ご研究(注3)が、すでにある。学習者は、「書き出し」で、迷い、苦労し、困っている。そう導かれた。

一　書き出しの一文

この教材所収の単元名は、「明日への力」、「高校生活のあり方を考え、自我の目覚めを促す」が目標である。教室では、単元「生の律動」の、永瀬清子「朝になると」を学び始めている。「自我を豊かに」が、目標である。

ここで、一見奇抜な「タンス」が、目標へとゆさぶりをかける。どう促されたか、どう豊かにされたか。入学当初の、新鮮な「理解」に裏打ちされた「表現」に、それを求めた。

まず、「書き出し」の一文に注目する。と、ひとりひとりの文の長さ・短さに、すぐさま、さまざまな個性が見てとれる。こうである。

概ね一一字から六〇字、とりわけ、二、三〇字と言えようか。しかし、実態は、さまざまな点にこそある。その長さゆえ、書き出す力が分散し惜しまれるもの、短さゆえ、力がきりりと集約されているものも、目立つ。が、一方、その逆のあり方を示すものも目立つ。

大村はま氏は、先のご指導の中で、運動部の人たちのスタート練習をいっしょに見られながら、「皆さんは、もう少し、ずばりと中心にはいって書き出すことを覚えるといいのだけれど。」(注4)を入り口にし、豊かな指導をされた。

では、先の長さ・短さの実態は、課題「わたしにとっての『タン

〈表1〉

		男	女	計	0〜10	〜20	〜30	〜40	〜50	〜60	〜70	〜80	〜90	〜100	〜110	〜120	〜130
A	㋑	36	25	61	2	7	17	6	11	10	4	3					1
	㋺	4	3	7		1	3	1	1	1							
	㋩	11	10	21	3	2	2	5	1	3	3		1	1			
	㋥	9	7	16	2	6	6	1		1							
	㋭	12	7	19		2	8	5	1	2	1						
B		13	15	28	1	8	5	9	3	1					1		
C		13	17	30	1	9	11	1	3	4			1				
合計		98	84	182	9	35	52	28	20	22	8	3	2	1	1	0	1

（注）〈表2〉参照。

ス」にこたえて、どう、「ずばりと中心にはいって書き出」しているか。一八二のありようは、こう分類される。

A　「タンス」を、「何か」ととらえて、書き出している型

㋑　独自のことばでこたえている型

㋺　まずは、「わかる。」とこたえるにとどまっている型

㋩　本文のことばでこたえている型

㋥　標題を再確認してこたえようとしている型

㋭　ひとまずは、「わからない。」とこたえている型

B　「タンス」を、家具のそれそのものととらえて書き出している型

C　一見、別と思われる題目をとらえて、書き出している型

この類型を、〈表1〉の文の長さ・短さのあり方と組み合わせて一覧する。つぎの〈表2〉がそれである。書き出しの実態が、ある。

〈例〉

A—㋑

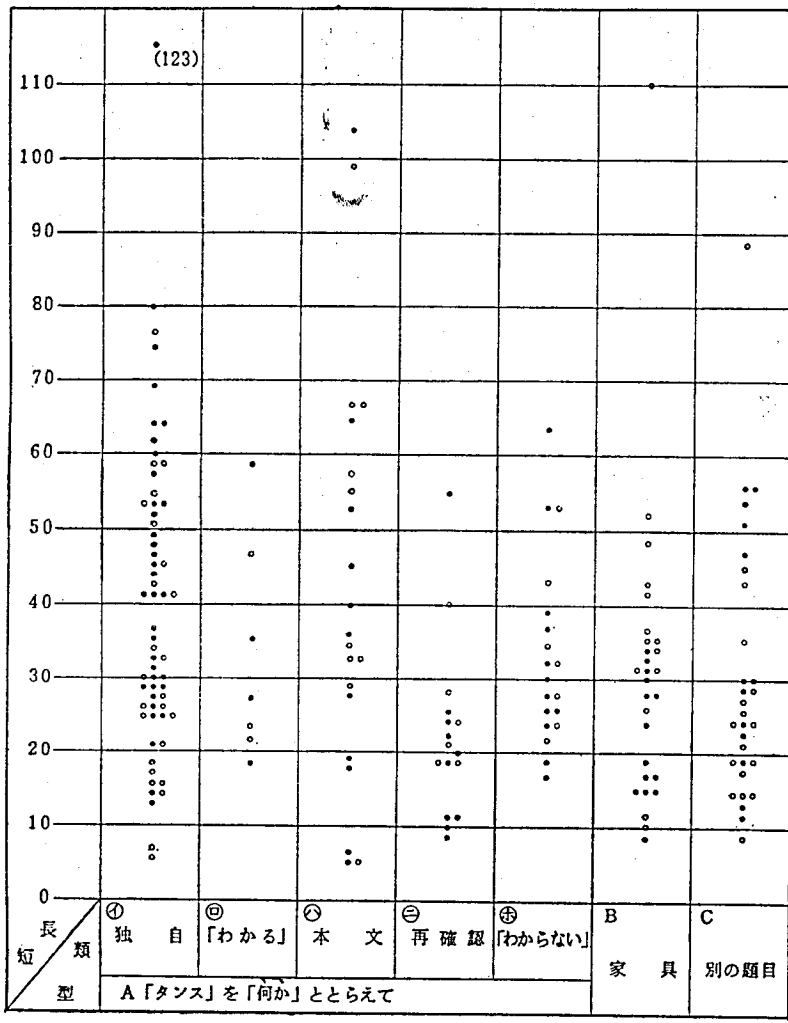
①　他人にはわかってもらえないような一面は、私にはいくらでもある。

②　僕には、「自分にとってのタンス。」（ママ）などはないだろうと思っていたが、よくよく考えると、一つだけではあるが僕にもあった。

③　重い——。

④　ぼくにとってタンスにあたるものといえば、「一生懸命にする」ということだろう。

⑤　友達は、最も大きく重い「タンス」に変わってしまうことが



〈表2〉

(注) ●は、男子、○は、女子。「長短」は、文字数。

ある。

◎ ①漠然としたこたえ、②反省、③性質指摘、④こと止まり、⑤もの止まり、がある。

① 自分では「タンス」にあたる一番大切なものの想像はつく。

② タンスという言葉は、私に、妙に懐かしさを感じさせる。

③ 「タンス」というものを、本当に言うとすれば、何かとしかいえないと思う。

◎ これらは、ことばを求めている。

A—㈧

① 自分にとっては非常にたいせつなもの、しかし、よその人にはどうしてもわかってもらえない何か。

② 映画の中の二人がしょっていた、タンスという物をまず考えてみると、それは、自分にとっては非常に大切な物なのに、どうしても他人にはわかってもらえず、それを見るやいなや逃げだされてしまうような物だ。

◎ これらは、本文の表現に頼っている。

A—㈢

① ここに出てくるタンスは、いったい何を表しているのだろう。

② 「あなたにとってタンスとは何ですか。」と聞かれたら私はいったいどう答えるだろうか。

◎ これらは、迷っている。

A—㈠

① 「あなたにとって『タンス』とは何ですか。」と今、尋ねられても私は一口に答えることはできない。

② 自分にとっては大切、重要なことで、他人にはわかってもらえないもの、そんなものは自分の中に存在するだろうか。

◎ これらは、こたえをあとに回している。

B

① わたしのタンスは、私が幼稚園に行くころから使っているものと、母の服が半分入っているタンスの二つである。

② タンスという物は、色々な家具の中にあって一番不かっこうだと思う。

◎ 家具に終始する例と、のち「自我」へひきつける例とがある。

C

① 中学生の頃の私のクラスメートたちは、松山千春や山口百恵の映画などなど、芸能界に多かれ少なかれ興味をもち、よくそのことについてのおしゃべりに興じていた。

② ぼくは時々道などを歩いていて、変な空想をすることがある。

◎ これらの多くは、先を見通している。

以上、ひとつには、類型別で、A—㈠が、全体のほぼ三分の一を占め、Aの他の合計やB・Cの合計に、匹敵する数を示している。また、文の長短との関係では、A—㈠・㈡・㈧、特に㈠の分散、㈢・㈠の集中B・Cの分離の特徴が、かなりはっきり現れている。

二　書き出しと第一段落の構造

さて、以上のような長・短で、さまざまなうけこたえを見せている書き出しの一文は、つづく第二文へとは、どのようにうけつがれているか。まずは、うけつぎ語に注目する。

〈表3〉

(しりとり)		0 1	1 0	0 0	0 0	0 0	0 1	2 0	5
指示詞	連体詞	6 0	0 0	3 1	0 2	0 0	1 1	3 3	20
	代名詞	7 3	0 0	3 1	4 0	0 0	2 1	1 2	24
接続詞	逆接	4 2	2 1	3 2	0 0	1 1	1 5	1 0	23
	順接	3 6	0 0	0 0	1 0	2 0	0 2	3 2	19
副詞		5 1	0 0	0 1	0 0	1 0	1 0	0 3	12
助詞		2 1	1 0	0 0	0 1	1 1	0 1	0 0	8
(投げ出し)		9 11	0 2	2 5	4 4	7 5	8 4	3 7	71
(1) 書き出し		㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	182
		A							合計

(注) 数字は、左上が男子、右下が女子。

〈表4〉

連体詞	この(9), その(7), そんな(3), ある(1)
代名詞	それ(20), これ(3), それぞれ(1)
逆接	しかし(15), でも(4), だけど・だが・ところが・と言っても(各1)
順接	そして(6), だから(3), なぜならば(2), つまり(2), ようするに(2), したがって・たとえば・すなわち・また(各1)
副詞	そう(3), たとえ・やはり・もちろん・結局・おそらく・まず・たしかに・まだ・まして(各1)
助詞	から(3), も(2), より・の・と (各1)

ひとつには、いわゆる指示詞や接続詞をまったく生かさずに、第二文がぽんと投げ出されている例が、七一例も見られる。これは、後述のように、「言いかえ」の多さにも因る。

ふたつには、それに対して、いわゆる指示詞や接続詞などにより、関係をすっきりさせた例が、合わせると、それ以上見られる。中でも、代名詞の「それ」、接続詞の「しかし」の例が目立つ。他は、さまざまである。

つぎに、これらの例を、第二文のうけつぎ方によって、九つの類型にも整理する。

〈表5〉

(2) 書き出し	㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	合計
	A							
転換	0 0	0 1	0 0	0 0	0 0	0 1	0 0	2
自答	0 0	0 0	0 0	8 2	3 2	0 0	0 0	15
反証	7 2	2 1	4 2	0 0	1 1	1 5	1 3	30
理由	1 2	0 0	2 0	0 0	2 0	0 1	1 1	10
結果	1 1	0 0	0 0	0 0	0 1	0 2	4 2	11
時間経過	2 0	0 0	1 0	0 0	0 0	0 0	3 0	6
補足	2 8	1 0	0 3	0 2	1 1	2 2	2 7	31
例示・詳述	6 2	0 0	1 0	0 0	1 0	5 2	0 0	17
言いかえ	17 10	1 1	3 5	1 3	4 2	5 2	2 4	60
								182

(注) 数字は、左上が男子、右下が女子。以下同じ。

〈例〉

A—㋑を書き出しとする例

① ぼくにとっての「タンス」、それは言葉でははっきりと言い表せないけれども、たぶん、ぼく自身の「心」であると思う。自分にとっては非常にたいせつなもの、しかし、よその人にはどうしてもわかってもらえない何か、それが「心」だと思う。(男・投げ出し・言いかえ)

② この映画のタンスのように自分にとってはとても重要なものであっても、他人から見ればじゃまで価値のないものはたくさん存在する。それらのうちの一つは自分の希望どおりのことに挑戦できる自由であろう。(男・代名詞・例示)

③ わたしにとって、タンスが象徴するものは家族であると思う。家族は、時には、私自身の他人には、知られたくない部分を隠してくれ、またある時は、永久におろすことのできない、重荷である事を感じさせるからである。(女・助詞・理由)

A—㋺を書き出しとする例

① 最初読んだとき、おもしろい映画だな、と思った。私にとってのタンスは、思いやるをもつ気持ちである。(女・投げ出し・転換)

② この「タンスと二人の男」という映画は、自分が言葉にできなかったようなものを映像という形で表現してくれたような気がする。(加藤注。改段。)映画の最初と最後の場面の対照的なこともおもしろい。(男・助詞・補足)

A—㋩を書き出しとする例

① 自分にとっては非常にたいせつなもの。しかし、よその人にはどうしてもわかってもらえない何か。そんなものが自分にはあるだろうか、全く、見当がつかない。（男・連体詞・反証）

② 映画の中の二人の男がしょっていた、タンスという物をまず考えてみると、それは、自分にとっては非常に大切な物なのに、どうしても他人にはわかってもらえず、それを見るやいなや逃げだされてしまうような物だ。それをわたし自身の心理の中にあてはめてみると、それは、わたし自身の個性、わたししか持っていない性格だと思う。（女・代名詞・言いかえ）

A—㋺を書き出しとする例

① ぼくにとっての「タンス」。すなわち、自分にとって非常にたいせつなものというものは、他人に理解してもらうのはもちろんのこと、自分が他人のことを理解するのも、むずかしいことだと思う。（男・順接・自答）

② ——わたしにとってのタンスとはいったい何か？——わたしは今まで一度もそんな事を考えたことがなかった。（女・連体詞・補足）

A—㋩を書き出しとする例

① 一体、わたしはタンスつまり自我というものを持っているのだろうか。他人にわかってもらえない何かはあるような気がする。（女・投げ出し・自答）

② この文章を読んで、まず最初に感じたことは、ただタンスを持っているというだけで人々の態度が冷たくなるだろうかということであった。たとえば今（ママ）、タンスを持ってホテルへ行ったとしても、いやな顔はするだろうが、しぶしぶ預かってくれると思う。（男・順接・例示）

Bを書き出しとする例

① 毎日毎日、何気なしに使っているタンス。別に何の意味もないタンス。（男・投げ出し・言いかえ）

② タンス、と聞いて最初に頭に浮かんで来るのは大切な衣服をしまっておくものとしかいいようがない。しかしこの『自立と試行』を読むと、タンスに対してのイメージがちがってしまう。（女・逆接・反証）

Cを書き出しとする例

① 私は、自分自身、人に見せられない部分があると思っている。もちろん、人に見せられないのだからいいことではない。（女・副詞・補足）

② 中学の時、よく反抗した。反抗しているうちに、理由もなにもない、ただ反抗している自分に気づく。（男・しりとり・時間経過）

ひとつには、〈表3〉の「投げ出し」にもかかわり、「言いかえ」型が六〇例と目立つ。「ずばり中心にはい」っているか。大事な問題がある。

ふたつには、「補足」型が、三一例ある。「例示・詳述」型とも合わせると、四八例となる。

三つには、その反面、「反証」型、つまり、第一文に対して、たとえば、「しかし」などで論を逆転させる型も、三〇例ある。あるいは、「結果」へと深めたり、「理由」で明確化している型と合わ

せると、五一例となる。また、「自答」の型の例も、一五例ある。

以上、書き出し二文の関係を、整理した。

さて、では、これらの第一・第二文の関係を含んだ第一段落は、どのような構造になっているか。〈表6〉〈表7〉に、それを示した。

〈表6〉

第一段の文数 ＼ 書き出し	㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	合計
17			1△				1△	2
16	1△							1
15								
14					1△		1△	2
13			1			1△	1△	3
12			1				1△ 2△	4
11	1△	1△					1△ 1△	4
10	2△ △ 1	1△		1△	1△ 1△			7
9	1△ 1△			1	1△			4
8	2△ △ △ 2	1△	1		1△	1		8
7	3 △ 3			1	1		1 1	10
6	4 2	1△		1	3 1	2 3	1	18
5	3	1	1 △ 2	1		4 2	1 1	16
4	6 2		1 3	1 1		4	3	21
3	1 2	1	3 1	3 1	1 2	2 3	3 3	26
2	6 7	1	1 1	3 1	3 2	4 1	2 2	34
1	7 4		2 2	1	1	1	3 1	22
	A							182 合計

(注) 数字は、左上が男子、右下が女子。△は、一文章一段落の数。

〈表7〉

中心のあり方 ＼ 書き出し	㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	合計
一文一段	7 4	0 0	2 2	1 0	1 0	0 1	3 1	22
尾括	13 6	2 0	5 3	5 4	6 3	7 7	8 7	76
中括	3 3	0 3	4 5	3 3	3 2	1 5	2 4	41
頭括	13 12	2 0	0 0	0 0	2 2	5 2	0 5	43
	A							182 合計

(注) 数字は，左上が男子，右下が女子。

まず、第一段落を構成している文の数を、第一文の類型別に示したのが、〈表6〉である。六ないし七文以下が、大半を占めている。これは、「一文章一段落」の△印の例を除くと、もっと顕著な特徴となって見えてくる。

つぎに、中心文の位置によって、第一段落の構造を、①頭括、②中括、③尾括、④一文一段、の四つの類型に分け、これらをも、第一文の七つの類型との関係で示すと、〈表7〉のようになる。書き出しの落ち着き方である。

〈例〉

A—㋑を書き出しとする「頭括」の例

○ 「タンス」とは、思春期における悩み、そのものだと思う。自分にとって大切なもの、それが他人に理解してもらえない腹立たちさ、寂しさは耐えがたいものだ。私は今まで、その孤独に陥るのが怖くて、タンスを隠してきたように思う。別に意識してそうしているわけではないが、潜在意識の中に、人に嫌われたくないという意識があったからだと思う。（女）

A—㋺を書き出しとする「中括」の例

○ タンスという言葉は、私に、妙に懐かしさを感じさせる。タンスは、私のさまざまな思いを、ずっとしまい続けて来た。しかし、近頃は、そんな愛着心も感じなくなって来た。ただの物を入れる道具という気持ちが、なんとなくする。だから、もし人がタンスをかついでいるのを見たとすれば、それは、何の値うちもない物に思え、大きくて、やっかいで、うっとおしいという気持さえおこるかもしれない。（女）

A—㋩を書き出しとする「尾括」の例

○ 自分にとっては、少しやっかいではあるがとても大事なもの。しかし他人から見るととてもやっかいなもの。そんな「タンス」とは、いったいなんであるのか。（男）

A—㋥を書き出しとする「尾括」の例

○ 自分にとっては非常にたいせつなもの、しかし、よその人にはどうしてもわかってもらえない何か。それは何であろうか。考えてみるとなかなか思いつかない。しかしあえて言うならば、それは、私が毎日生活しているときの心の柱となっているもの、すなわち私の生活信条、これがタンスではないだろうか。（男）

A—㋭を書き出しとする「尾括」の例

○ ぼくは、正直に言って、この「タンス」の意味がわからなかった。何度か読んだけれどもどうしてもわからなかった。それはまだ、自分がその「タンス」を持っていないからかもしれない。ぼく自身にはこの「タンス」のようなものはないように思う。まぁ意味が、わからないのだからそれは当然かもしれない。でも、自分の人生で今まで、自分には確かな確実なものなのに、他人にどうしても理解してもらえなかった、という記憶が少しある。（男）

Bを書き出しとする「中括」の例

○ ここにタンスがある。自分の意志を持っているものは、すべてこのタンスを持っている。鍵のついているタンスである。（女）

Cを書き出しとする「尾括」の例

○　私が中二の時、みんなのために何かをしてあげようと思い立ち、クラス委員に立候補しました。自分なりに一生懸命やったつもりでしたが、みんなの反感を買うことが多かったのです。私にも行き過ぎの点はありましたが、クラスをまとめようと思ってやったことなのです。つまりこれが私のタンスなのでした。

（女）

以上、第一段落との関係で書き出しを見た。

三　書き出しと文章の構造

さて、第一段落をこのように書き出した四〇〇字の文章は、全体としては、それにかかわって、どのような構造を持つに至っているのか。まずは、その「終わり」の類型に、つぎには、その「続き」の類型に注目する。

（一）「終わり」の類型四つの内容例

Ⅰ　解釈・分析・現実指摘・補足・事実提示

Ⅱ　決意・主張・意志・意見・感想

Ⅲ　展望・期待・願望・懸念・推量

Ⅳ　悔恨・反省・回顧

（二）「続き」の類型四つの内容例

Ⅰ　解釈・分析・現実指摘・詳述・補足・換言・例示

Ⅱ　決意・主張・反証・意見・感想

Ⅲ　願望・懸念・推量

Ⅳ　反省・試行・自問・疑問・回顧

これらは、書き出しの一文の類型とのかかわりで、第一段落の構造別に、こう整理される。

〈表8〉　第一段落が「頭括」の場合

終わり＼続き＼書き出し		㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	43	
		A							合計	
Ⅳ	Ⅳ	1							1	2
	Ⅲ								0	
	Ⅱ								0	
	Ⅰ					1			1	
Ⅲ	Ⅳ	1				1		1	3	18
	Ⅲ	1				1	2		4	
	Ⅱ	1 1							2	
	Ⅰ	2 2	2			1	1	1	9	
Ⅱ	Ⅳ	1							1	8
	Ⅲ	1							1	
	Ⅱ								0	
	Ⅰ	2 3						1	6	
Ⅰ	Ⅳ	1					1		2	15
	Ⅲ	1					1		2	
	Ⅱ						1	1	2	
	Ⅰ	5 2					1	1	9	

〈表9〉 第一段落が「中括」の場合

書き出し	終わり	㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	合計	
Ⅳ	Ⅳ								0	3
	Ⅲ	1						1	2	
	Ⅱ								0	
	Ⅰ			1					1	
Ⅲ	Ⅳ			1		1			2	12
	Ⅲ			1					1	
	Ⅱ	1	1						2	
	Ⅰ	2	1	1	1		1	1	7	
Ⅱ	Ⅳ			1		1			2	9
	Ⅲ								0	
	Ⅱ						1		1	
	Ⅰ	1		1	1 1	1	1		6	
Ⅰ	Ⅳ			2	1		1	1	5	17
	Ⅲ		1		1				2	
	Ⅱ							1	1	
	Ⅰ	1		1	1	1 1	2	1 1	9	
		A					B	C	41 合計	

〈表10〉 第一段落が「尾括」の場合

書き出し	終わり	㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	合計	
Ⅳ	Ⅳ							1	1	5
	Ⅲ								0	
	Ⅱ								0	
	Ⅰ			1	1	1	1		4	
Ⅲ	Ⅳ	3			1 1	2		1	8	26
	Ⅲ	3		1				1	5	
	Ⅱ	1			1			1 1	4	
	Ⅰ	2		1	1	1 1	2	1	9	
Ⅱ	Ⅳ				1		1	1	3	20
	Ⅲ					1			1	
	Ⅱ	1			1	1			3	
	Ⅰ	5		1	1		1 2	3	13	
Ⅰ	Ⅳ	1				1	1		3	23
	Ⅲ						1 1		2	
	Ⅱ	1	1				1	1	4	
	Ⅰ	1	1	1 2	1	1	2 1	3 1	14	
		A					B	C	76 合計	

(注) A㋑，A㋩の「終わり」Ⅰには，「続き」を欠く例が各1ある。

〈11〉 第一段落が「一文」の場合

終わり＼続き＼書き出し		㋑	㋺	㋩	㋥	㋭	B	C	合計
Ⅳ	Ⅳ	1							1
	Ⅲ								0
	Ⅱ								0
	Ⅰ			1					1
Ⅲ	Ⅳ								0
	Ⅲ	1							1
	Ⅱ								0
	Ⅰ	2 2							4
Ⅱ	Ⅳ	2							2
	Ⅲ	1							1
	Ⅱ								0
	Ⅰ			1 1				1 1	4
Ⅰ	Ⅳ							1	1
	Ⅲ	1							1
	Ⅱ								0
	Ⅰ	1		1	1	1	1	1	6
		A							22

まず、〈表8〉第一段落が「頭括」の場合。中で、Ⅰで終わる類型、Ⅲで終わる類型が、それぞれ一五例、一八例と、二本柱をなす。その多くは、Ⅰを「続き」とす。「わたしにとっての『タンス』」へのこたえ方のひとつの傾向がある。

中でも、〈表7〉で見たように、A—㋑の類型に、例がかたよっている。「始め」ずばり中心に入る書き出しは、「続き」では、多くは慎重に、「終わり」では、多くは切実な懐いを述べる。

つぎに、〈表9〉第一段落が「中括」の場合。ここでも、「頭括」の場合とほぼ同じことが言えようか。ただし、書き出しA—㋺・㋩・㋥・㋭においても、その特色を示している点が違いはする。「中括」の方が、やや多彩と言える。

つまり、全体としては、やはり、Ⅰで終わる類型、Ⅲで終わる類型が、四分の三近くを占めていて、その多くは、Ⅰを「続き」としている。「頭括」の場合と比べると、書き出しの一文が、多くの可能性を持つと言えようか。

さらに、〈表10〉第一段落が「尾括」の場合。ここでも、先の二つの場合にほぼ見合って、Ⅰで終わる類型、Ⅱで終わる類型、Ⅲで終わる類型の割合が、一定して、全体を三分する。

また、「続き」とのかかわりで見ると、ⅠとⅡとは、先の二つの場合同様、Ⅰを「続き」としているが、Ⅲに、それらとの違いが見える。すなわち、Ⅳをはじめ、さまざまな「続き」がある。Ⅲとしての「終わり」を生み出す過程の、さまざまな類型が、見てとれる。

最後に、〈表11〉第一段落が一文の場合。本質的には、「頭括」に入れるべきか。ここでは、その形を重視して、別項を立てて考える。

ひとつには、小規模ながら、先の三つの場合とは違って、ⅠやⅢの数の割には、Ⅱの方が、むしろ目立っている。多彩である。

ふたつには、A—㋑を除くと、Ⅲで終わる類型、Ⅳで終わる類型が、皆無に近い。

三つには、いずれの「終り」の類型も、その多くの「続き」をⅠとしている点が目立つ。

このように、第一段落の構造の四類型別に、四〇〇字の文章全体の構造を、その「続き」と「終わり」との二本柱の内容に照らして見た。

ひとつには、「続き」に、四つの類型とも、解釈や分析、現実指摘など、対象化する例が主流を占めていると、見てとれる。制限された四〇〇字のわくの中では、多くは、ここでの緩みが、全体の構造にも、好ましくない影響を与えている。この中だるみを警戒し、「終わり」をどうきりりとするかに、工夫がいる。

ふたつには、「終わり」は、その多少や割合の違いを別にすると、ほぼ、解釈型、決意型、願望型に三分される。もちろん、少数とはえ、反省型の存在も亜い。ここには、文章の形式や論理を越えて、学習者の、標題の要求にこたえる内実のあり方が、如実に現れている。「理解」と「表現」との接点がある。

以上、書き出しの一文、書き出しと第一段落の構造、書き出しと文章の構造——の三つの角度から、「書き出し」の実態をとらえた。

四　書き出す力

では、ここで、ひとりの四〇〇字全体像をとらえて、右の三つの面を確かめてみよう。

〈例〉——K君の場合——

(1)　「どうして僕に触れないの。さあ、すぐにでも触れてくれ。」都市では多くの人が孤独である。そして、一人で疎外感を感じる。氷のように冷たい、それが近代都市の本質だ。

(2)　他人と共有することのできない物。誰もがそんな物を持っている。しかし、大人というものはそれを覆い隠そうとする。何故か。それは社会と同化するためである。隠してしまうとそれは即、没個性へとつながり、ただの社会の歯車になってしまうのだ。

(3)　しかし、若者は理解してほしいと苦労する。しかし、「タンス」の中味はわからない。人には見えない、その中味。誰にもわからないそれ。しかし、それはその人の最後の武器だ。捨ててしまってはいけない。「タンス」を持っていることが、生きる証となるのだ。

(4)　私のタンス。それは人には言えない。しかし、行動が私のタンスを明確にする。タンスはあと十年は私の体にひっついたままだろう。私は闘う。（男・A—㋑・第一段落が「尾括」・Ⅱ—Ⅰ・解釈—分析—決意）

まず、同じA—㋑類型の中でも、書き出しの一文に、大きな特色がある。一見、C類型のように見えながらも、まるで、全身をあのポーランド映画に投入したかのような、深い理解と、それに裏打ちされた独創がある。

つぎに、第一段落の四つの文からなる構造に注目してみる。第二

文は、「投げ出し」の形で、第一文の内容を「分析」し、一般化している。第三文は、さらに「分析」を深め、比喩ながら、「尾括」の役を果たしている。「言いかえ」や「補足」の例に比べて、無駄がない。

ここに、「理解」から「表現」へ向けての、指導の課題が、まずはある。深く思いを潜めた、短文のぬきさしならぬ結びつきが、求められる。そのためには、一～三文の短文作文、一〇〇字程度の文章表現の技能学習がいる。

さて、つぎには、第二段落と第三段落とからなる、大きな「続き」の部分に注目しよう。第二段落での「大人」批判が、冷静にふまえられて、ねらいをはずさず第三段落に転じている。「続き」も、また「尾括」の構造を持つ。

その上で、第四段落の「終わり」が、四〇〇字を少しはみ出しはしたが、全体をもしっかりと「尾括」している。現実を見すえての「解釈」、「大人」との対比による自らの「分析」。その上で、たった四文字の一文が、その「決意」を述べ、書き出しに呼応して鋭い。

つまり、K君の場合は、まずは、「終わり」の「決意」が、書き出しにおいて、すでにしっかりと押さえられている。「続き」の冷静さも、また、よく見通されてのそれである。

ひとつには、「理解」を通して身につけえた価値学習の成果を、まずは一文できちんと「表現」する。さらに、それを、いくつかの短文に分けてみる。中心にすべき題目が精査される。その上で、その一文こそを、標題の要求に直結させて位置づけたい。A—㋺・㋩・㋥・㋭の類型への傾斜には、注意したい。

ふたつには、その中心の一文を第一文として、第二文のうけつづけをはっきりさせなければならない。そのときには、「言いかえ」や「例示」・「詳述」・「補足」への傾斜には、十分の吟味を経たい。二文作文の徹底が必要となる。接続詞・指示詞も、使いこなしたい。

三つには、この段階で、おたがいの書き出しを比較し、別の可能性や、自己の表現の推敲への道を吟味したい。さらには、適切な指導助言を通して、「終わり」の一文をも見通し合いたい。その上で、もう一度、書き出しの、特に第一文のあり方を再吟味し全体の構造を推敲したい。K君の例は、そう教えている。

おわりに

わたしは、先に、「理解」と「表現」との「統合」をと、こう説いた。——「理解」こそが、「表現」の意欲をかきたて、「表現」こそが、また、「理解」を点検し、深め、価値学習を高めていく。——と。(注5)「国語Ⅰ」を展望してである。

では、その出発点は、どこにあるのか。その実態について、わたしは、今まで、漠然とした先入観を持って対していたにすぎない。あの小中学校段階での豊かな「表現」力が、「教室」の中で、なぜ、生きの良さを失ってきたのか。少くとも、どのような段階から出発しようとしているのか。押さえなければと思う。

①「『書く』力を」、(注6)②「『書く』意欲を」、(注7)と、方法を模索してきて、わたしは、ここに、先学に導かれて「理解」と「表現」の接点を、③「書き出す力」に求めねばならないと思い始めた。本稿で示したように、それは、さまざまな個性として、確かな形をそ

こに示している。教えられて、「統合」への道を伐り拓きたい。

注1　『新版現代国語Ⅰ』三訂版（三省堂）所収。

2　(1)『国語教室の実際』（共文社）所収。

(2)『やさしい文章教室』（同）所収。

3　『作文教育の探究』21（文化評論出版）所収。

4　2の(2)に同じ。

5　拙稿「わたしの『国語』教室――主題による統合の試み――」（「国語教育研究」二六号）

6　拙稿「『書く』力を――加悦谷高校生の場合――」（「国語教育研究」八号）

7　拙稿「『書く』意欲を――『現代国語』学習体系における作文教育の目標――（抄）」（「教育委員会制度発足三十周年記念論文集」大阪府教育委員会）

（一九八一・九・二一記）

（大阪府立豊中高等学校教諭）